次の文章を読み、設問に答えなさい。

「私」の住んでいるQ町の河川敷にガゼルが現れた。そのことがインターネットで紹介されて以降、多くの人がガゼルを見に河川敷に集まるようになった。ガゼルの生活領域は柵で囲われ、大学生の「私」は、その周囲を見張る警備員のアルバイトに応募し、働き始める。

その女性は、河川敷にガゼル[1]が現れたという記事が出た当初から、週に三度ほどの頻度で柵の周辺にやってきていた。いつも携帯か一眼[2]を構えていて、ガゼルの写真や動画を常に撮影していた。彼女が来るようになって十日ほどが経過したのち、私は一緒に柵の補強の作業をしていた職員さんから、彼女は自然保護課の課長の知り合いで、趣味でSNS[3]にガゼルの写真や動画をさかんにアップロードしている人なのだと聞かされた。河川敷のガゼルの様子が気になる人々は、日本全国にa**チャクジツ**に増え始めていて、彼女のSNSのフォロワー[4]や閲覧者も日に日に倍増しているという話だった。職業は、フリーランス[5]のデザイナーなのだという。だから昼間でもガゼルを見にやってきて、撮影していけるのだった。自分より年上の女性の年齢は、あまりよくわからないのだが、三十代後半から四十代のどこかというぐらいに見えた。いつもきちんと化粧をしていて、服装も立ち居ふるまいもさっそうとしていた。ガゼルの日々の様子について、べつの訪問者に写真の撮り方やら何やらレクチャー[6]していることもあったし、私と職員さんの柵の補強作業を手伝ってくれようとすることもあった。

働き始めてしばらくが経過した私はというと、とにかくこの仕事のぼんやりした感じは自分に向いているから、もう大学には戻らず、ずっとこの仕事をしていたい、だからガゼルにはどこにも行ってほしくない、と思い始めていた。もはや、授業も論文も就職活動も自分の人生から排除してしまって、ただガゼルを囲う柵の傍らで一生働く、ということを夢想しながら、私は日々柵の周りを歩哨[7]していた。

（中略）

ガゼルを見に来る人々は、彼女のほかにもたくさんいたけれども、私が顔や背格好を覚えているのは、彼女とほかにもう一人、小学校高学年かせいぜい中学一年というぐらいの年齢の少年だけだった。彼は、足しげくというわけではないのだが、三週間に一度ぐらいの頻度でやってきては、長いこと、それこそ私の勤務時間の最初から最後まで、朝番[8]の同僚によると早朝から、柵に寄り添って一日中過ごすのだった。

彼がガゼルを「ものすごく好き」であることは、ガゼルをじっと見つめる、夢見るようなまなざしを一目見ればわかることだったが、①それ以上に私がそのことを実感したのは、彼がガゼルに何らかの呼びかけをしようと柵から身を乗り出し、口元に手を当てて、しかしいつも何も言わずじまいに終わることだった。

何かを言いたい、でも、何を言ったらいいかわからないし、ガゼルが呼びかけを望んでいるかどうかは、ガゼルの姿を見れば見るほど不確かになる。彼の様子からは、そういった逡巡[9]が伝わってきた。

彼が写真を撮ったりしてガゼルについての何かを記録しているところを、私は一度も見かけなかった。朝の時間帯に働いている同僚にたずねてみても、彼はただ、柵のそばで静かに過ごしているだけだという。時折、図鑑のようなものや本を読んでいる。一度職員さんが、町のウェブサイト[10]のブログ欄[11]に掲載するために、ガゼルと同じフレームに入った写真を撮影しないか、と打診したのだが、彼は頑なに、はい、とは言わなかった。彼は、ガゼルを見つめながら、どこかでガゼルにその存在を知られたくないと考えているように思えた。

（中略）

②Q町は、ガゼルが河川敷に来たことで、この数か月まい上がりっぱなしと言ってよかった。ガゼルを町で保護し続けて、その見物人を呼び込み、町のキャラクターとして利用する気でいた。ガゼルを河川敷で養う費用を考えると、それも当然といえる話ではある。しばらくしたら、ガゼルが苦手と思われる日本の冬が来るのだが、その処遇については不透明なままだった。

連日ガゼルの写真や動画を撮影している女性のテレビカメラ[12]の前の態度は、そつ[13]がなかったと思う。③ファンというよりは記録者ですね、と自称する女性は、ガゼルを眺めていると、生命の直線的なエネルギーにふれているようで気分が良くなる、ということと、日本のQ町の河川敷にガゼルがいるという奇跡を、できるだけの質量で残したい、と話していた。その後、ガゼルの写真や動画を見たい人はここまで、と女性のSNSのアドレス[14]が全国ネットのニュースショーで流れたので、放送の直後はアクセス[15]が殺到したものと思われる。

少年が息せききって現れたのは、テレビの取材班が撤収[16]した後のことだった。午後三時を回ったところで、彼が来る時間としては遅い方だった。その日は平日で、学校などはないのだろうかと私はb**シアン**したのだけれども、自分自身休学[17]中の身なので、うるさいことは問わないことにした。

けっこうな距離をずっと走ってきたのか、いつまでも柵につかまってガゼルを目と頭で追っている少年を見かねて、私は自分用の水筒を差し出して、べつに口を付けて飲んでくれていいから、と言うと、少年は何度も礼をして、水筒の中身を飲み干してしまった。

さっきまでテレビの取材が来てたんだよ、と言うと、少年は、そうですか、と肩で息をしながら、川べりで草を食んでいるガゼルを見つめていた。町の自然保護課の課長さんと、ツイッターとフェイスブックにたくさん写真や動画をあげている女の人が取材を受けてた、とそのままのことを報告すると、少年はやはり、そうですか、と言っただけだった。

手持ち無沙汰になった私は、④町のウェブサイトに、放映日と取材されていた女の人のSNSのアドレスがのると思う、と報告したけれども、少年はほとんど何も聞いていないというような上の空の顔つきでガゼルをじっと眺めていた。そして、何か言いたげに右手を挙げるのだけれども、やはり何を言ったらよいのかはわからないという様子で手を下ろし、ガゼルにひたすら見入った。

私はその時、彼には大量の情報も記録もいらないのだ、ということをなんとなく悟った。ガゼルと過ごす、さして多くもない時間こそが、彼には大事なものなのだ。私はそれを邪魔しないようにその場を離れた。彼はやはりガゼルを見つめていた。時間を止めてやれないものか、と私は本当に一瞬だけ、そんなくだらないことを考えた。

（中略）

女性は今や、Q町のガゼルをウェブを通して眺めている人々の間では、第一人者といっていい存在だった。全国ネットのニュースショーに出演したのち、他の局の取材も受けるようになり、ガゼルのことはその女性がいちばんよく知っていると認識されている状況になりつつあった。

それから、また平日の昼間に、※⑰くだんの少年がやってきたので、これからガゼルをゆる※⑱キャラにしようという計画があるそうだよ、と告げると、少年は、そうですか、とまったく興味がなさそうに軽くうなずいて、柵に両手をかけて身を乗り出し、ガゼルを上半身全体で追い始めた。彼は不登校か何かなのだろうか、と私は少しだけ詮索し、いやだから自分自身も不登校みたいなものじゃないかと思い直してやめた。

その日は、運が良かったのか、ガゼルはずっと少年の方に頭を向けていた。見ていたのかどうかはよくわからない。ガゼルの考えていることなど、私たちにはわからない。ただガゼルは、少年か、もしくは少年の背後の風景を、真っ黒な目でじっと見ていた。⑤少年は、逡巡を見せたあげく、右手をゆっくりと挙げて、ガゼルに向かってふった。私は、そんな大きな動作をしたらガゼルはこちらを見てくれなくなるかもしれないよ、と言いそうになったのだが、ガゼルは彼の方を見つめていた。

「きみは行きたいところはないのか？」

⑥少年は、やっとガゼルに対して言いたいことがまとまったようで、そう口にした。

「おれは北海道に行きたい。学校には行きたくない」

そうか、と私は思いながら、地面に座り込み、柵にもたれて三時のおやつの菓子パンの袋を開けた。私は特別に北海道に行きたいというわけでもなかったけれども、決して行きたくないということもないので、⑦彼の叫びが自分の叫びであるような気もした。北海道はともかく、とにかく学校には行きたくなかった。私も、学校と北海道なら、圧倒的に北海道に行きたかった。

少年の声に驚いたのか、不快なものでも感じたのか、ガゼルはすぐに回れ右をして川べりへと向かい、周囲の草を食み始めた。少年はガゼルをじっと見つめていた。そして、ここへ来てくれてありがとう、と大声で言った。ガゼルは彼に一瞥もくれず、より遠い所へと走り去っていった。

Q町が本当にガゼルのことを思うのであれば、いつまでもガゼルを河川敷にいさせるべきではない、という意見の噴出は、遅かれ早かれ予想されていたものだった。少し考えたらわかることだ。ガゼルが現れるということがこれだけ特別視されるというのは、当のガゼルにとって現在の環境は異例中の異例であるということで、それは要するに、居心地のよい環境であるとは決して言えないということを意味していた。

ガゼルの来訪で活気づいていたQ町が、簡単にガゼルを手放すとは思えなかったのだが、そこはみんな大人であるし、ガゼルをいつまでも囲い込もうという姿勢でいるほうが町の評判を下げるという判断のもと、⑧ガゼルを他県の動物園に引き取ってもらうという案が浮上し始めた。ガゼルはすでに、動物のことを気にしている日本人の間ではかなり評判になっていたので、引き取って大切に世話をしたい、という動物園はすぐにいくつも現れた。Q町は、ガゼルの将来のためにもっとも良い環境を誠心誠意探す、と宣言し、ガゼルを引き取ることになった動物園とは緊密に連携し、その動物園のある市町村とも、ガゼルを通して**cユウコウ**関係を結ぶ、というとても優等生的な態度を選択することになった。

私は、ガゼルが河川敷からいなくなると、アルバイトとはいえ仕事を失うことになるのでとても困るのだが、ガゼルが河川敷にいるのは一時的なことだとはじめから考えているところもあったし、諦めは意外に早くついた。もともと、こんなにらくな、自分に向いている仕事を永遠に続けられるはずもないのだ。人生はそんなにむ

しの良いものではない。私は知っているはずだ。一生でもっとも楽しい時期だと言われる大学生活で打ちのめされたのだから。一緒にときどき話している職員さんも、まあこれから寒くなるから、ガゼルのためにずっと外で仕事するっていうのもきついし、それでいいのかもね、と言っていた。

ガゼルの引き取り先については、じっくり検討する、ということで、ガゼルが河川敷から離れると決まってからも当分、ガゼルは河川敷で暮らしていて、私も柵のそばで歩哨を続けていた。ガゼルのいなくなる日、私がこの自分にあった仕事から離れなければいけなくなる日に、ぼんやりと思いをはせながら。

ある日、いつもガゼルの撮影をしているあの女性が、険しい顔つきで私の所にやってきて、クリップボードにはさんだ用紙を見せて、ボールペンを渡してきた。

「警備員さんの考えを聞かせてほしいの」

用紙には、びっしりと人の名前が書かれていた。私は署名を求められているのだった。まだ開始して三週間だったが、ウェブで募ったものも併せて、すでに二千名に達しているという。

「ガゼルのためっていうけれども、動物園に行ってしまうと、ここよりはずいぶん狭いところで世話をされることになるわけでしょう？」

それは確かにそうだった。ガゼルのための河川敷の柵は、約３００メートルにわたっているとのことで、それほどまでに大きなスペースを、ガゼルが動物園で与えられるとは考えにくかった。

「端的にそれはかわいそうよね？　それに、ガゼルがここを選んでやってきたということ自体に注目してほしいの。単純に、ガゼルはここを気に入ってるんじゃないかしら？　私はずっとガゼルの様子を見ているけど、何かすごくストレスをためているような所は見かけたことがないのね。だから、ガゼルはここにいたいんじゃないかと思うのよ」

女性は、有無を言わせない口調で話した。言っていることは筋が通っているように思う。「急激な環境の変化を与えるよりは、ここをガゼルにとって住みやすい場所にすべきじゃないかしら。それにガゼルはこの町の宝よ。ずっと住民の手の届くところにいるべきよ」

私はうなずきながら、女性の話を聞き終わり、すすめられるまま、名前のリストの最後に自分の名前を書き足した。ありがとう、と女性は言った。⑨女性の「住民の」という言葉は、「私の」とも言いかえられるんじゃないかと私はぼんやり思った。女性の落ち着きは、堅く隙のないものだったが、その表皮の下には焦りが見えた。

知り合いであるという自然保護課の課長とは、この件が元で決裂したという。ガゼルの行き先は、比較的暖かい九州の南部の動物園や、もっと言うと沖縄になるという可能性もあるとのことだった。Ｑ町からはとても遠い。

女性の話を聞き、自分の名前を書き足すというだけの出来事だったが、私は彼女が去った後、自分がどっと疲れていることに気がついた。女性の必死さが、背中の側からのしかかってくるようだった。

北海道に行きたいが学校に行きたくない少年が現れたのは、それから一時間ほどが過ぎてのことだった。彼だってガゼルには行ってほしくないだろう、と私は考えたので、ガゼルが動物園に引き取られようとしているのだが、それに反対するために、ここで署名を集めている人がいて、と説明すると、少年は、そうですか、とうかない顔でうなずいた。

「君も名前を書きたいだろうから、明日ここへその人が来たら、用紙を預かっておくよ」

私がそう言うと、少年は、ああ、ああ、と状況を理解しているのかしていないのか、という様子で何度か首を縦にふった。

それよりも彼は、ガゼルが突然かけ出したことに気を取られたようだった。おお！　と少年は柵から身を乗り出して叫び、大きく手をふった。ガゼルは見向きもしなかった。

「⑩走りたかったのか！」

少年は言った。見たままのことを。私は、ガゼルが柵の端まで移動した後、また反対側にダッシュしていく様子をじっと見守った。

「走りたければ走ってくれ！」

少年は、ガゼルに向かって右手を掲げた。自分に与えられた領地の端まで走ったガゼルは、柵に沿ってゆっくりとこちらへやってきた。ついにガゼルは、少年がふれられるほどの距離に近付いてくる気になったのだろうか、※⑮と固唾をのんで見守っていると、突然ガゼルは右向け右をして、また川べりへと歩いていった。

少年はさぞ落胆しているだろう、と私は隣にいる彼の顔を軽く見下ろしてみたのだが、そうでもなかった。走りたいんだな、と少年は呟いた。私は、走りたいんだよ、と彼に聞こえていてもいなくてもいいと思いながら、同じことを言った。ガゼルは悠然と草を食んでいた。

署名は最終的に一万名をこえたという。女性は、Ｑ町の人々のおかげでもあるが、やはりＳＮＳでも募ったの

が大きかった、と私に説明した。その日は集まった署名を、Q町の町長に渡しに行くという日だった。私の一日の仕事の最初の一時間、つまり、十三時から十四時まで、女性は河川敷にいて、やはりガゼルの画像と動画を撮影していた。本当に、水ももらすまい、一秒も落とすまいという勢いで。ガゼルのことがものすごく好きなんだな、と私は平たく思った。

女性は、柵の周囲に集まってきていた見物人たちに、⑪自分はガゼルをよそへ行かせないために活動している、と説明して回って、最後の署名をかき集め、それでは行ってきます、と役所へ出かけていった。結局あの少年は、ガゼルを行かせないために名前を書くことはなかったな、と私は思い出して、彼もものすごくガゼルを好きだと認識していたので、不思議に思った。

テレビの取材があった日と同じで、少年は河川敷でのエポック[※㉙]な出来事と常にすれ違うように、その日も遅れて現れた。やはり平日の昼間だったので、まだ学校に行きたくないという気持ちは続いているようだった。学校に行った方がよいのではないか、ということは、私が学校に行っていない分、まったく説得力もなく、告げる権利もない内容だったので、少年がランドセルを背負った状態でやってきても、何も言わなかった。

ガゼルをよそに行かせないで、この河川敷で世話をし続けてくれっていう陳情[※㉚]の署名集めさ、今日で終わりだったんだよ、と私は彼に説明した。彼は、そうなんですね、とちゃんと内容を理解しているのかどうかわからないような口調で答えた。とにかく彼にとって大事なことは、ガゼルのいる方向に頭を向けて視界に入れることで、私の話やその他のことに対してはすべて上の空を貫いている様子だった。私は、彼が署名にどうという反応を見せなかったことに、なぜか少し安心した。

季節の変わり目で、前日と比べて突然気温が下がった日だった。少年以外の人々は、私も含めて、顔を合わせると第一声が「寒くなったね」で、サバンナ[※㉛]出身のガゼルにとっては過酷な気候になりつつあるようだった。確かに、広い領地を提供できるのはQ町だけれども、ガゼルを寒さから守る方法を考えるのはなかなか難しいように思えた。ある一帯に屋根をかけて、暖房を置いたりすればいいのだろうか。それにしたって費用がかかりそうだ。

その話を、べつに聞いていなくていいやと思いながらも少年にすると、珍しく彼は、川を温泉にするとかどうですかね、とガゼル本体以外についての考えを示した。それは屋根をかけるよりもお金がかかりそうで、私は笑ってしまった。少年は、温泉に入っているサルをテレビで見て、ガゼルが寒くなってきたらこういうことができればいいな、と思ったのだ、と説明した。川べりの一部を囲って、ほかの水と混ざらないようにして、毎日お湯を注ぎに行けばそれらしいことはできるかもしれない、と私たちは話し合った。

夕方になると、朝「寒くなったね」と話し合っていた時分と同じぐらい気温が下がってきたので、ガゼルを見物する人たちは、早々にいなくなってしまった。少年以外は。帰らないの？　とはきけなかった。大きなお世話だったから。

夜の二十時になっても少年は帰らずに、工事用のライトに照らされたガゼルを目で追っていた。私は、まかないの晩ご飯を持って来てくれる職員さんに、少年の分の温かい飲み物や食べ物も持ってきてくれるように頼んだ。費用は、私のアルバイト代から引いてくれていい、と言うと、それはべつにいいよ、と職員さんは言ってくれた。

役所の方では、町長と女性と自然保護課の課長の三者で、ずっと話し合いが行われていると職員さんは言った。そりゃ、一万も署名が集まっちゃったら、無視もできないんじゃないのかな、と職員さんは言った。この町の人口のおよそ四分の一が一万人らしい。私は、自分の住む町の人口が四万人であることを、その時に初めて知った。

【柵の傍らに座り込んで食事をしながら、少年は少し話をしてくれた。他県に住んでいるのだが、月の小遣いをやりくりして交通費を捻出[※㉜]し、ガゼルを見に来ていること、今日はどうしても昼休みにたえられなくなり、そのままこっそり学校を出てきてしまったこと、北海道へ行きたいということ。特に、釧路と紋別に行きたいと彼は言っていた。彼と比べて、私が話すことはほとんどなかったけれども、とりあえず、大学を休学中であることと、この仕事をずっとしていたいのだがそれは叶いそうにない、ということを話した。】

ガゼルがよその動物園に引き取られる方向で進んでいる、ということについては、少年は、仕方ない、と言った。そりゃずっと姿を見ていられたらうれしいけれども、仕方ない、と少年はうつむいて、呟くように言った。ガゼルを見続けることは自分の喜びだけれども、それは自分の喜びであってガゼルの喜びではない。かといって、動物園で世話をされることがガゼルにとっての幸せかどうかもわからないのだが、ここに居続けることもまた、ガゼルにとって幸せかどうかはわからない。

柵の向こうで大きな動きがあったのは、私たちが食事を終えて、またガゼルの様子を見ようと立ち上がってからすぐのことだった。柵に背を向けておとなしく座っていたガゼルが、突如として走り出したのだった。上流の側へと、見たこともないような速さで向かっていた。上流には山がある。柵の中にいた、ガゼルを観察するためのカメラやライトの調整にやってきていた自然保護課の職員さんたちは、どうしたんだ！　とまっしぐらに上流

へと走っていくガゼルを追いかけようとしたが、もちろん人間の脚では追いつかなかった。
少年もまた、柵に沿って上流の側へと走り出していた。私もそうした。ガゼルが、ほんの一瞬だけ少年の方をふり返るのが、私にははっきりと見えた。
「行け！」少年の叫び声が聞こえた。「⑫行きたければ行ってくれ！」
ガゼルが地面をけって飛び上がり、柵を飛び越え、そのまま上流の方へとかけていく様子を、柵の傍らに備え付けられた工事用のライトが照らしていた。
少年は、柵のd八てまで走って、やがて膝に手を突いて息を切らせた。ガゼルの姿は、もう見えなくなっていた。この話が職員さんに報告されて、上流での捜索がなされるとして、ガゼルはその前に山へ逃げ込めるだろうか、と私は思った。そもそもサバンナに山はなさそうだから、ガゼルにとって良い環境でもないだろうけれども、サバンナにだって木はあるだろう、と私は上流の方を見つめながら、ぼんやりと考えに身を任せていた。河川敷であろうと、動物園であろうと、上流の山の自然であろうと、そもそもどこもガゼルにとっては場違いなのだ。どこもかしこも居心地が悪いのだとしたら、それは柵や檻の外を選ぶだろう。
⑬行け、と少年がまた言うのが聞こえた。私はうなずいた。ただ幸運を祈った。

（津村記久子「河川敷のガゼル」（『サキの忘れ物』所収）より）

〈語注〉
※①ガゼル…アフリカなどの乾燥地帯に広く分布するウシ科ガゼル属等のほ乳類の総称。イラスト参照。
※②一眼…一眼レフカメラの略称。きれいな写真が撮れる高級なカメラのこと。
※③ＳＮＳ…ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略称。インターネット上で、人々が交流するためのサービスのこと。あとで本文に出てくる、ツイッターやフェイスブックなども、その代表例。
※④フォロワー…自分の気に入ったＳＮＳの投稿を閲覧しやすくするために登録をしている人のこと。
※⑤フリーランス…会社などに所属せず、自由に仕事ができる人のこと。
※⑥レクチャー…分かりやすく教えること。
※⑦歩哨…警戒や見張りを仕事とすること。
※⑧朝番…午前中を中心として任務につくこと。
※⑨逡巡…決心がつかず、ためらうこと。
※⑩ウェブサイト…ホームページのこと。
※⑪ブログ…日記形式で作られるホームページのこと。
※⑫テレビカメラ…30行目の中略部分に、テレビ局が取材に来たことが書かれている。
※⑬そつがなかった…不自然でぎこちないところがないこと。
※⑭アドレス…インターネット上の連絡先のこと。
※⑮アクセス…主にインターネット上で、自分の求める情報に接すること。
※⑯休学…許可を得て、長い間学校を休むこと。
※⑰くだんの…前に話題にした、例の。
※⑱ゆるキャラ…「ゆるいキャラクター」の略称。見る者をなごませるキャラクターのこと。
※⑲固唾をのんで…ことのなりゆきが気になって緊張して。
※⑳エポック…話題性のある、みんなが注目しそうな。
※㉑陳情…公的機関に実情を訴え、対応を求めること。
※㉒サバンナ…雨の少ない熱帯地方の、まばらにしか木の生えていない草原のこと。
※㉓捻出…無理やりに金銭を用意すること。

〔設問〕解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一　═══線a「チャクジツ」（5行目）、b「シアン」（41行目）、c「ユウコウ」（91行目）、d「ハ」（202行目）のカタカナを、漢字で書きなさい。

二　――線①「それ以上に～終わることだった」（21～22行目）とありますが、

（1）「そのこと」とは何を指していますか。本文中から二十字で抜き出して答えなさい。

（2）「少年」が「いつも何も言わずじまいに終わる」のはなぜだと「私」は考えていますか。説明しなさい。

三　――線②「Q町は～利用する気でいた」（31～32行目）、――線③「ファンというよりは～話していた」（35～38行目）とありますが、ここで「Q町」と「女性」は、ガゼルに対してどのように向き合っていますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア　Q町はガゼルの生存を気にかけており、お金を集めることで保護しようとしているが、「女性」はガゼルが純粋に好きで、その野生の姿を全国に届けてみんなを勇気づけようとしている。

イ　Q町はガゼルのかわいらしさを発信して世の中を明るくしようとしているが、「女性」はガゼルが持つ生命の直線的なエネルギーを発信することで、Q町を有名にしようとしている。

ウ　Q町はガゼルを有名にして、観光客を呼び寄せようとしているが、「女性」はネットを活用して、ガゼルについて、実際にQ町を訪れるよりも多くのことが分かるようにしようとしている。

エ　Q町はガゼルが見物人を集めていることに注目しており、それを利用して町を盛り上げようとしているが、「女性」はガゼルの存在に強くひかれ、その姿を記録し発信しようとしている。

四　――線④「町のウェブサイトに～じっと眺めていた」（50～52行目）とありますが、ここからは、「少年」がガゼルに対してどのように向き合っていることが読みとれますか。説明しなさい。

五　――線⑤「少年は、逡巡を見せたあげく、右手をゆっくりと挙げて、ガゼルに向かってふった」（68～69行目）、――線⑥「少年は、やっとガゼルに対して言いたいことがまとまったようで、そう口にした」（72行目）とありますが、このような「少年」のあり方から、どのようなことが読みとれますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア　ガゼルを見ているうちに親近感が増し、心が通じ合ったように思い、自分の望みをガゼルの望みとしてとらえるようになったので、ガゼルも自分と同じ場所に行きたいのだと考え、確かめようとした。

イ　ガゼルが何をしたいのかを考えることを通して、自分自身が何をしたいのかを考えるようになり、それがはっきり言えるようになったことで、ガゼルの望みについても問いかけられるようになった。

ウ　ガゼルが本来いるべきではない河川敷に閉じ込められていることをかわいそうに思うとともに、自分にもどこか遠くに帰る場所があるのではないかと思い、ガゼルにその場所を教えてもらおうとした。

エ　河川敷に現れたガゼルを心配するあまり、他のことが考えられなくなってしまったが、どうしたらよいのかを考え続けた結果、ガゼルは逃げるべきだと思い、その気持ちがあるのかをたずねようとした。

六　――線⑦「彼の叫びが自分の叫びであるような気もした」（75～76行目）とありますが、どういうことですか。具体的に説明しなさい。

七　――線⑧「ガゼルを他県の動物園に引き取ってもらう」（87～88行目）とありますが、「Q町」がガゼルを手放すことにしたのはなぜですか。説明しなさい。

八　――線⑨「女性の～焦りが見えた」（119～120行目）とありますが、ここで「私」は、ガゼルを河川敷に残そうという「女性」の主張にどのような思いを感じとっているのですか。説明しなさい。

九　――線⑩「走りたかったのか！」（134行目）とありますが、かけ出したガゼルを見て、「少年」がこのように言ったのはなぜですか。説明しなさい。

十　――線⑫「行きたければ行ってくれ！」（199行目）とありますが、ここでの「少年」のガゼルに対する思いは、――線⑪「自分はガゼルをよそへ行かせないために活動している」（150行目）という「女性」の思いとどのように違いますか。説明しなさい。

十一　――線⑬「行け、と少年が～ただ幸運を祈った」（208行目）とありますが、

（1）「私」は、ガゼルが柵の外に出た理由をどのように考えていますか。説明しなさい。

（2）柵の外に出て、かけていくガゼルに対する「少年」の言葉を、「私」が受け入れたのはなぜですか。本文全体をふまえ、【　　】（182～186行目）の部分に注目して説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

受験番号	
氏　名	

（２０２１年度）

国語解答用紙

一

a

b

c

d

二

1

2

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

1

2

（合　計）

（整理番号）